

# 小樽高商入学の小林多喜二

倉 田 稔

## 目 次

- 1 高商入学
- 2 修学旅行
- 3 志賀直哉
- 4 『種蒔く人』
- 5 芸術の悩み
- 6 わが家に帰る
- 7 家に帰った時期
- 8 なぜ伯父の家から解放されたか。
- 9 『蕨入』
- 10 小林家の人々
- 11 豆撰女工
- 12 高商2年になって
- 13 文学へ
- 14 授業
- 15 友達思い
- 16 校友会誌

## 1 高商入学

小林多喜二は、1921年（大正十年）3月に、北海道庁立小樽商業学校（庁商）を卒業した<sup>1)</sup>。同年3月28日に、小樽高等商業学校（小樽高商、または

---

1) この伝記第2部として、本稿を次のように読んで頂ければ、有難い。

1. 「小樽高等商業学校と渡辺龍聖」（『商学討究』第44巻4号 1994年3月）
2. 本稿
3. 「小樽高商の先生たち」（『商学討究』第45巻1号 1994年8月）

高商、と略す)の入学試験を受け<sup>2)</sup>、合格した。多喜二は、小樽高商に入学することによって、ほとんど将来の生活は安定することが約束された。伯父も安心して金をだしたろうと、小笠原氏は言う。

同学年生・古関周蔵は、A組となった。ほとんど毎日図書館に通った。夜の閉館までいた。そこにもう1人、夜の閉館までいる学生がいた。

小樽高商では、一年生は4クラスに分れた。その1クラスは商業学校卒業生のクラスであった。他の3クラスは中学校出のそれである。多喜二は商業学校出であったので、その級つまりDクラスに入った。彼が第一学年で履修した科目は、修身、国語漢文、会話(つまり英会話)、英作文法、英文解釈、商業英語、商業地理、経済原論、法学通論、税関倉庫、工学、商品理化、体操、応用理化、英語、代数幾何であった。

そして、以下のような諸先生に教わったのではなかろうか。修身を、小尾範治に。国語漢文をト部岩太郎に。英語の類を、マッキンノン、中村和之雄、苔米地英俊、大平頼母、中村賢二郎、浜林生之助、小林象三、河合逸治の8人のうち5人に。商業地理を寺田貞次に。経済原論を高島佐一郎か佐原貴臣に。法学通論を伴房次郎か橋詰益哉に。商品理化をL. H. フランク、西田彰三、小瀬伊俊のうちの誰かに。体操を管安右衛門か加藤将秀に。代数幾何を小幡孫二に。<sup>3)</sup>

多喜二は入学後1年たって、自宅の若竹町から高商に通学を始めた。高商の同学年生、森 武臣は書く。「かれ [=多喜二] は・・・小学校の教師をしていた姉の仕送りで通学していた。」<sup>4)</sup>だが、小林三吾氏夫人は、多喜二が姉の援助を受けていなかった、という<sup>5)</sup>。姉=チマが小学校の教師をしていた記録は今のところ無い。だから森の記憶違いであろう。多喜二は、高商時代は伯父の援助を受けていた。

2) 大正10年度の入試問題が発見され、昭和49年5月以降の新聞に出た、と言う。

3) 小樽商科大学『緑丘五十年史』1961年

4) 森「小樽高商の多喜二」(『緑丘』42)

5) インタビューより。

石本氏あての七月の葉書では、高商に入った直後の彼の意図が伝えられている。「勉強はあまりしない積りだ。たゞ小説を少しばかり研究してみたい。」<sup>6)</sup> 少しばかりというのは、控え目な表現であろう。小説について彼は、すでに庁商を卒業する直前から、手造りの個人誌「生れ出ずる子ら 一」を書いていた。高商に入ってから、「生れ出ずる子ら」を作り続けていた。そのうち二と三とが『全集』では残されている。それ以外にも、習作の類を書いている。高商に入ってから彼の文学研究は、本格的になった。

嶋田正策は言う。小林は、自分自身の作品をいつでも発表できる場を作ろうとしていた。『素描』を止めてから、彼は西洋紙を四つ折りにし、横長にミシンで綴り、自筆で『生れ出づる子ら』という自分の作品集を作った。さらに<sup>7)</sup> 当時発刊されていた『小説倶楽部』や『文章倶楽部』『新興文学』あるいは、高商2年には小樽高商の交友会誌の編集委員に選ばれて交友会誌にも投稿した。

多喜二は小樽に住んでいるから、高商の寮には入らなかった。庁商からは、すでに述べたように、同学年生は、多喜二以外は二人しか入学しなかった。手塚英孝は伝記で、多喜二が高商に入学しても友人がいなかった、と書いたが、それはそのためでもある。決して彼が友だちを作らなかったとか、作れなかったとかということではない。

多喜二の同級生、森武臣は、そのころから台頭しかけた軍事教練に反感を抱いていて、教室を抜け出しては校庭の片すみに臥して、本など読んでいた。いつかしたら、もう一人の青年が校庭の彼のいる所と反対側でごろごろしているのを意識するようになった。しかし森も、彼も、別に言葉を交わすことなく一年くらい経過した。どちらかともなく近寄って、名乗り合ったが、それが多喜二であった。

多喜二は、小柄で、額のなきびをいつも気に病んでいた。人なつっこい性格でかつ潔癖、不正はトコトンまで憎む男であった。余り勉強はせずに成績は上

6) 『民主文学』1984年2月

7) 島田（『本郷だより』18）

の部にあったようである、と。

多喜二が森の宿を訪ねてきて、洪茶をすすりながら、人間性、社会、人の幸福などについて語り明かしたことが何回かあった。また森は、大学ノートに克明に書いた小説の批評を求められたこともしばしばあった。<sup>8)</sup>

体操の先生は、管 安右衛門大尉であった。軍縮の時代だったので、いたってのんきな教練であった。ある学生が和服の上から薬ごうをつけて現れると、「そんな服装では教練ができないから見学せよ」ということであった。その後、教練の時間には和服が多くなった。

入学して久木<sup>9)</sup>は、同じ教室で多喜二を見た。彼と多喜二は、帰りが途中まで同じだったので、よく一緒に歩いた。多喜二は彼に「お前は哲学なんかやって何になるのだ」と冷やかすので、彼は「お前は小説なんか書いたってどうするんだ。小説以上に面白い話は街に一杯あるぞ」とやり合ったものであった。

多喜二は、高商では小説一本にしぼることにした。また、高商時代にはあまりマルクス主義を勉強していない。

多喜二が入学した年の6月には、下記の人が1年生として在学していた。ただし原簿を五十音順に変えた。新入生と留年者との両方である。(現代漢字にした)。古い原簿には、名前の下に、出身・階級が記されている。例えば多喜二は、秋田平 とある。本籍が秋田県で、平民と言う意味である。ここではしかし、表記はしない。

秋田俊雄 雨谷茂民 荒木田定道 足立登 青木清太郎 植田侯男 梅原剛陽 生方一郎 岡部伊十郎 大木弘基 大熊康吉 大久保好 大村孝義 大谷辰男 大西政治郎 大庭勇 奥野盛夫 奥平信作 奥田建二 小倉謙三 小野尚志 小田善雄 岡田宣治 飯野英一 飯田武臣 石沢壽三 石黒政信 石川清四郎 石岡彦次郎 石原巖 石井宗 井上保 井鍋正雄 稲田省吾 板垣武男 伊藤利孝 伊部政次郎 岩崎達郎 岩館清志 岩垂裕 木谷利治 木村吉三郎 北村友次郎 桐田尚作 古関周蔵 (東海銀行専務 → 千代田火災会長)

8) 森「小樽高商の多喜二」(『緑丘』42)

9) 久木久一 (『緑丘』42)。久木は多喜二と3年間同じクラスであった。

向常賢一 小宮山猛次郎 小松千萬生 小林豊 小林好一郎 小林多喜二  
 小池嘉勝 倉島一郎 栗山孝吉 久納清一 久保田敏三 久保吉幸 黒後鶴雄  
 黒田広治 桂田勝三郎 蚊野俊夫 鹿野平治郎 兼平一郎 金岡辰男 金井  
 健四郎 交野盛賢 香川清夫 加藤誠次 加藤鉉 河合邦吉 海江田武夫  
 上谷己世治 角谷源兵衛 神保清 椎野良之助 島崎伊兵衛 島義治 篠源愿  
 一 鈴木満 須川淳一 桜場春彦 桜井長徳 境常誠 榊原義英 早乙女宗治  
 佐々木 重臣 佐々木 興 佐々木良雄 佐野四満美 佐藤定一郎 佐藤泰  
 一郎 佐藤徳弥 佐藤虎夫 堤武 塚原栄吉 田崎善造 武内栄太郎 田村武  
 雄 田中清二 田中修吉 田中栄次郎 棚橋省吾 多田源蔵 高松勲 高桑市  
 郎 高村弥三郎 高橋大 高橋興五郎 高橋格 高浜年尾 立花英二 谷村義  
 三郎 谷弥太郎 茶谷豊彦 徳橋周吾 豊口一郎 富樫武 長富優 永井次郎  
 永井逸郎 中島烈勇 中山栄 中谷一郎 中谷道英 中村拾 中上仁三郎  
 中川三五 成田傳夫 西村迪 西尾清一 乳井甚三郎 新妻五郎 野口興七  
 野田久作 野界作成 乗富道夫 沼倉盛滋 姫野 享 久木久一 東口環 広  
 島進 広野幸一 福島正民 福田勇一郎 二馬吉郎 古館啓次郎 藤崎操 藤  
 田栄 本間勇太郎 星野新八郎 星野季郎 星野輝敏 堀岡栄一 蓮田勉二  
 浜田左内 林俊一 林文平 林九郎 早川仙蔵 原田成博 幡豆英男 羽生貢  
 眞野勇 松本喜一 松永外雄 松川一馬 松原新平 町野勉 前田重男 右  
 野喜代司 宮川里義 宮尾又市 水上貞 三沢澡一 三宅武夫 三浦兵太郎  
 武藤武 門間冬見 百田嗣郎 毛利直二郎 森川藤次郎 山内準三 山田稔  
 湯沢淳 湯口善太郎 渡辺誠太郎 渡辺清 渡辺三郎 渡部勉<sup>10)</sup>

## 2 修学旅行

六月には、恒例の修学旅行があった。このころ多喜二はまだ、伯父の家に厄介になっていた。庁商時代には、伯父は修学旅行にはお金を出してくれなかつ

10) 『会員名簿』平成3年発行 緑丘会；『大正十三年卒学生文集』から

た。だから修学旅行には行かなかった。多喜二が遠慮して申し出なかったのかも知れない。高商の時代には、さすがに多喜二は修学旅行に行けたのである。伯父が金を出さざるをえなかったのかもしれない。つまり小樽のエリート高商生を修学旅行に行かせないとはみっともない。もっとも修学旅行の金を誰が出したかは分かっていない。例のアルバイトから多喜二が自分で出したということも考えられ、実家を出したかもしれない。

多喜二が高商の一年生の修学旅行で室蘭に来たとき、親友で庁商の一年先輩で、室蘭に勤めていた島田正策<sup>11)</sup>は、多喜二を会社の寮にシャニムニ泊めた。会社の島崎・皆川が一緒だった。島田は室蘭には一年半いて、後に再び小樽に転勤することになる。

多喜二は個人誌「生れ出ずる子ら」を相変わらず作っていた。1921年8月に書いた「生れ出ずる子ら 二」では、多喜二は、次のような問題を抱えていた。

「小説はテーマ小説でなければならぬであろうか。将た、志賀直哉氏のような小説であるべきであろうか。誰か考えて下さい。

テーマ小説とは、主題小説（使命小説（語弊があるがわかり易く。例えば菊池寛の小説や戯曲））ということなのです。」<sup>12)</sup>

彼は『小説倶楽部』に投稿を続ける。

越崎宗一は、多喜二より二年先輩だが、庁商、高商と、同じように学んだ。彼によると、多喜二は庁商時代から既に文才があり、片岡亮一<sup>13)</sup>や坪田豊夫<sup>14)</sup>、西岡徳蔵<sup>15)</sup>などと共に、文学グループを作り、ときどき集まっていた。越崎は

11) 正策は、大正9年3月に庁商を出て、すぐ三菱炭売に就職し、10月に室蘭支店に転勤した。

12) 『小林多喜二全集』新日本出版（以下、『全集』と略す）第6巻、420ページ

13) 高商卒業、日銀へ。

14) 一橋卒業、三菱鉱業へ。

15) 西岡徳蔵、歌人、庁商卒業、量徳小学校の教師、少なくとも昭和5年にはいた。その後、東洋大学を優秀な成績で卒業、庁商の教師になる。昭和15年4月5日奉職した。国語を担当した。退職したのは昭和36年3月29日。「原始林」の歌人で、「落葉林」の主管だった。歌集を出している。そうした歌会のグループをつくっていても、当時は特高につきまとわれた。（田中氏手紙）

坪田に誘われ、何度かその会に出たことがある。多喜二は当時、短編長編ものを盛んに書き、文学雑誌に投稿していた。その集まりでは彼は若い方だったが、こと文学に及ぶや、仲々負けていず、熱弁を振るったものである。この時代にすでに文章を練り、文学には大いに野心をもっていたのだろう。しかし小説家として身を立てるとまでは考えていなかったと思う、と越崎は書く。<sup>16)</sup>この会合は、庁商時代か高商時代かは分からない。

### 3 志賀直哉

小林多喜二が高商に入ったころ、もちろん彼は、社会・政治問題よりも、文学芸術に集中的に関心を寄せていた。

文芸では、1910年に雑誌『白樺』が出た。自由で理想主義的な傾向の作家たちが白樺派に集まった。多喜二は特にこの中から、志賀直哉、有島武郎を読むのである。

多喜二が志賀直哉に傾倒するのは、高商時代らしい。そのきっかけは島田である。島田正策が菊池寛の『文芸往来』を買った。その中で、志賀の『城の崎にて』を的確な表現だといって非常にほめていた。それがきっかけで二人は志賀を読むようになった。<sup>17)</sup>

志賀直哉の生涯で最も脂の乗っていた時期は、我孫子時代である。大正12年3月に京都に引っ越すので、多喜二が高商2年までは、志賀は我孫子である。

もちろん彼の有名な作品は我孫子時代の前にもある。「城の崎にて」「赤西蛸太」「和解」である。だが我孫子時代には新作の短編だけでも、「十一月三日午後の事」「流行感冒」「小僧の神様」「雪の日」「焚火」「真鶴」と発表している。大正10年には「暗夜行路」が雑誌『改造』に連載が始まり、その年一杯で「前編」を完結させ、すぐ「後編」の執筆にかかっている。

著書も多数出版された。大正2年の「留女」の後、大正6年に「大津順吉」

16) 「多喜二抄」(『緑丘』42, 31ページ)

17) 『北方文芸』1968年3月, 51ページ

それから「夜の光」,「荒絹」,「暗夜行路」前編(大正11年7月6日 新潮社),  
などである。志賀は我孫子で,柳宗悦,武者小路実篤,バーナード・リーチと  
交友した。芥川龍之介や中勘助とも知り合っている。ただし里見弾とは,大正  
5年以来絶交中であった。

なお京都へ引っ越す直前から,志賀は四年間スランプにおちいり,「暗夜行  
路」を書けなかった。<sup>18)</sup>だから多喜二はこの時代に志賀を学んだとか卒業した  
と言っても,彼の最大傑作の前編しか知らないのである。それでも多喜二は志  
賀に夢中になった。

#### 4 『種蒔く人』

日本の社会主義文学史上の,プロレタリア文学とその運動の初まり,と言わ  
れる『種蒔く人』が,1921(大正10)年2月に創刊された。小牧近江(こま  
きおうみ)が中心になり,有島武郎が財政的援助をして出された左翼文化・文  
学総合雑誌であった。

日本のプロレタリア文学は,次のように考えられている。日本では,雑誌  
『種蒔く人』の創刊(1921)を指標として「プロレタリア」文学は運動とし  
て展開され始め,日本プロレタリア作家同盟(ナルプ)の解散(1934)に  
よって運動としては終止符を打たれた。<sup>19)</sup>

小牧近江(1894-1978)は,本名が,近江谷駒である。父は,秋田の衆議  
院議員近江谷栄次であり,家は北日本でトップの長者であった。彼はその長男  
であった。少年のころ暁星中学を中退し,父に連れられて,1910年に16才で  
パリに行き,父はそのままパリに彼を残した。父はその後事業に失敗した。小  
牧は,苦学しながらパリ法科大学に入った。1914年だった。ロマン・ロラン  
の『ジャン・クリストフ』を読んで人道主義に目覚め,第1次大戦の時,

18) 阿川弘之『志賀直哉』岩波書店

19) 祖父江昭二



1914年の夏、ジャン・ジョーレス<sup>20)</sup>の暗殺にショックを受けた。その後、アンリ・バルビュスの平和主義運動に参加した。

バルビュスは、フランスのジャーナリスト、詩人、文学者である。『地獄』(1908)、『砲火』(1916)、で反戦思想を出した。小説『クラルテ』(1919)で、共産主義的傾向を示した。後に多喜二がこれから大きな影響を受けるのである。バルビュスは「グループ・クラルテ」を創設し、1923年に共産党に入党する。彼は1932年に、ロマン・ロランと反戦・反ファシズム・アピールを発表し、アムステルダム反戦大会を開いた。モスクワで客死する。

さて小牧は、パリで武者小路実篤の平和主義的作品『ある青年の夢』を読み、感激し、フランス語に訳した。ソルボンヌ大学＝パリ大学（法科）を1918年に卒業して、クラルテ・グループ（1918年5月結成）に入った。そしてコミンテルンに関心を持った。1919年（大正8年）に10年ぶりに帰国した。帰国の際、バルビュスは小牧に、日本でも反戦運動のため同志を集めるようにと頼んだ。小牧は翌年すぐ、「新しい村」にいる武者小路に会い、平和運動を話した。武者小路は団体には加わず、有島武郎を推薦した。

小牧は、小学校のかつての同級生金子洋文と相談し、秋田県の故郷、土崎（つちざき）港の一角で『種蒔く人』（第一次）を創刊した。部数は200で、自分が資金を出した<sup>21)</sup>。1921年2月のことであった。同人は、今野賢三（1893－1969）、金子洋文（1894－）、山川亮（1887－1957）、近江谷友治（1895－1939）、畠山松治郎（1894－1946）である。これは丁度、多喜二が高商に入る直前である。小牧は、土崎では雑誌を3号（同年4月）まで出し、それでまずストップした。主に農村や地方の進歩的文化人に配った。

その後、新しく『種蒔く人』を東京で出した。第1号は、同じ年1921年の十月である。後者は第2次『種蒔く人』という。反戦・平和・人道主義の立場で編集をし、ロシア干渉戦争にも反対した。東京版の初めの同人は、小牧、今野、金子洋文、村松正俊、佐々木孝丸、山川、柳瀬正夢であり、その後同人は

20) Jean Jaurès (1859－1914)。フランスの社会主義者、その右派だった。

21) 著書『ある現代史』（法政大学出版 1965年）67ページ

18名にもなった。青野季吉、藤森成吉、小川未明、秋田雨雀、堺利彦などが参加し、カーペンター<sup>22)</sup>、アンリ・バルビュス、ワシリー・エロシェンコなどの外国人作家も名を出した。有島がまた資金の援助もした。この雑誌は発行とともに、発禁となった。ここではアナーキストとマルクス主義者とが一緒だった。そしてだんだんマルクス主義者が増えてきた。第2号が出、そして第3号が発禁となった。関東大震災では、朝鮮人虐殺の真相を明らかにしようとして『種蒔き雑記』を同年1923年に出し、これが終刊となった。この雑誌は短かったが大きな影響を与えた。<sup>23)</sup>

祖父江昭二は書いている。「大逆事件」(1910年)に始まる「冬の時代」の堅氷、つまり「時代閉塞の現状」(石川啄木)を打ち破るべき課題が客観的に提起されていた時、その「現状」を文学の世界で打ち破り得なくなった自然主義にあきたらない知識青年たちは、反自然主義の道を、しかし各人の教養体験・資質・問題関心等の違いに応じて、それぞれ別々に、歩いていった・・・

## 5 芸術の悩み

小樽は投書家の多いところであった。平沢哲夫、西丘はくあ、小林多喜二らが、『文章世界』、『文章倶楽部』、『中央文学』、『小説倶楽部』などの投稿欄で活躍していた。『中央文学』は、東京の春陽堂が発行した月刊誌で、竹下夢二が表紙絵を描いた。そして投書欄が充実していて、三木露風、若山牧水、長田幹彦、前田晁が選者になっていた。

小樽の投書家のなかでも一番名を知られていたのは、のちに林容一郎の筆名で『三田文学』などに小説を書いた平沢哲夫<sup>24)</sup>であった。平沢は主に『文章倶楽部』と『中央文学』に、詩、短歌、散文を寄せ、そのうちどれかがほとんど

22) 伝記 Chushichi Tsuzuki, *Edward Carpenter*, 訳, 晶文社, を見よ。

23) 小牧は、その後、国民新聞をへて、戦後、中央労働学院長、法政大社会学部長。著書『ある現代史』『フランス大革命』『フランス革命夜話』『種蒔くひとびと』。訳書、バルビュス『地獄』『クラルテ』、フィリップ『小さな町』。

24) 多喜二らと後に活躍する。『林容一郎全集』全1巻、あり。

毎月、雑誌に載った。

小林多喜二は、はじめ『文章世界』に投書したが、間もなく『中央文学』にも詩を出してみた。その大正九年六月号の「長詩」欄に、「春」という八行の詩が秀逸五篇中の一編として掲載された。

その前後に、伊藤整は、小樽の高島に住んでいた平沢哲夫から、整が毎朝会っている小柄な庁商の生徒が小林多喜二とあって、詩を書いている男だということを、手紙で教えられた。整が三つ年上の平沢に手紙を出す気になったのは、彼の名を雑誌でよく見かけていただけでなく、たまたま平沢の妹が三井物産で整の姉、照といっしょだったからである。<sup>25)</sup>

1921年の多喜二は、2月に、つまり庁商の時に、「生れ出ずる子ら」という個人誌を出した。そしてこの年、第四集まで発行する。この標題は有島の「生まれ出ずる悩み」をもじったのかもしれない。

『生れ出づる子ら』の第一集に、小品「真夏の病院」「トランプ」をのせた。小説「祖母の遺言」が『小説倶楽部』八月号で選外佳作になった。これは残されていない。この『小説倶楽部』は、民衆文芸社で1921年1月から月刊として出していて、1922年3月から、山田清三郎が編集をするようになった。

多喜二は、『生れ出ずる子ら（二）』に、スケッチ「汽車の中で」<sup>26)</sup>「姉妹」<sup>27)</sup>を8月16日に書いている。「汽車の中で」では、海水浴へゆく列車の中の小さな風景を描いた。「姉妹」は、ある姉妹の、ちょっとした恋のさやあてである。多喜二は、「この作品は短編小説になる資格が充分ある。自分はあとから、それを創るつもりだ。」と書いている。多喜二は、大作家になるかどうかはわからないが、恋愛小説も書ける。「生まれ出ずる子ら」の三には、標題の欠けた作品がある<sup>28)</sup>。執筆時期は不明である。主人公が卒業した中学のクラス会の相談と、蘭島海水浴へ行った話である。この作品の次に多喜二の通信がある。

25) 曾根博義『伝記 伊藤 整』六興出版 1977年 147ページ

26) 『全集』第6巻

27) 『全集』第6巻

28) 『全集』第6巻

「姉妹」に対して、相賀さんという人が意見をよせたが、多喜二はそれにたいして、エレン・ケイの『恋愛と結婚』によせたエリスの序から、文章を引用して答えている。<sup>29)</sup>

「悩み」は少し水準の上がった習作である。「姉妹」という作品が、再び書かれる。これは先の「姉妹」の改作である。そして短編小説となっている。テーマは同じく、男性をめぐり、姉の妹にたいする嫉妬であり、ストーリーが複雑になった。

『小説倶楽部』一二月号に、小説「ある嫉妬」が選外佳作となった。これは『全集』にはない。「ある嫉妬」は、「姉妹」を改作したものかも知れない。テーマが嫉妬だからである。だが今見つからないので、残念である。これらは皆、習作であるが、改作「姉妹」は習作にとどまらないと言える。

多喜二は、感想「疑惑と開拓」を8月16日に書いている。これは小説ではなく、多喜二の芸術上の悩みを書いている。これをとりあげよう。

多喜二は、初めの項「芸術の真生命について」で、ゾラの自然主義を挙げて問う。「『である』が芸術本来の使命であろうか？ その全部であろうか？ それかと云って実生活を離れて芸術が存在するであろうか？」

次に、ロマンテスト、ナチュラ [リ] スト、シンボリストを取り上げ、彼らの目的を問うた。なぜ彼らは、人生の断面を示し、夢のような空想を描き、人生の靈智を描いたのか。それを一体どうせよというのか。知るといふことは救いでもなんでもない。理解が人生にとってもなんにも安心を意味しないではないか。

この様な立場で創作してみても、その位なら安楽に暮した方がよいのではないか。以上の点で多喜二は苦しんでいる。だがもちろん、芸術は今云ったようであってはならないことを漠然と知ってはいる。そして、芸術の使命が何か教えて貰いたいと、訴えている。

十日ほど後の、次稿「歩み」では、今述べた立場を厭世的だったと反省して

29) 『全集』第6巻 446ページ。多喜二が婦人問題に関心を持っていることが分かる。

いる。そしてこの間考えた結果、芸術は月である、と見て、芸術の使命が意外に大きいことを知った。私は光明を見た、と書く。

だが「第二の疑問」では再び、初めの悩みに戻る。現実によりよく生きる、と考えたのに、ときどき暗い影がさすのはどうしたことだろう、と。<sup>30)</sup>

芸術を志す若き人の正当な悩みである。多喜二はしかしこれを克服してゆくであろう。

「龍介と乞食」<sup>31)</sup>は『小説倶楽部』に載った。乞食にだまされる話である。

さて『小説倶楽部』は、1921年1月から民衆文芸社が出していて、『新潮』新潮社、『新小説』春陽堂、『文章世界』博文館と並んでいた。1922年3月から山田清三郎が編集した。だが『小説倶楽部』は、ほどなく廃刊となった。1922年11月に『新興文学』が発行された。初めは山田、ついで伊藤恣——立野信之の親類で中地主——が編集した。<sup>32)</sup>これは1923年8月号まで続いた。関東大震災の1カ月前であるが、伊藤の資金が続かなかったからである。

『新興文学』が休刊せざるをえなくなって、それを山田清三郎は『読売新聞』の文芸欄に書いた。すると多喜二は折り返したように、伊藤あてに送ってきた。1923年8月25日の手紙である。当時の多喜二にとって『新興文学』がでなくなったことは、どんなにか残念なものだったかが、行間にあふれるものであった。<sup>33)</sup>

さて、庁立商業を卒業し、銀行に就職したばかりの時の片岡が、石本に書いた葉書が2通ある。<sup>34)</sup>これによると両人が親しかったことが分かる。6月の葉書では、片岡はこう記している。「新生の陽光が流れてゐる。俺達の前には、いま、感激と力に満ちた新しい世界が創造された。暗黒の中から逃れた俺達

30) 『全集』第6巻

31) 『全集』第6巻

32) この人を、伊東整とまちがえて記す人がいる。それは全くありえないことである。

33) 山田清三郎『プロレタリア文化の青春像』新日本出版社 26ページ

34) 1つは、片岡亮一から、区内仲之町、相田方、石本武明あて、大正10年4月20日消印の葉書。2つは、同じく、片岡亮一、若松町3、から、区内弁天町9、の石本あて、大正10年6月25日消印の葉書。ともに署名はR. Kataokaとある。小樽文学館に所蔵された。

は、正に高調し切った感動のまゝ、焦点に向って歩みをつゞけ様ふ。」

ここで暗黒とは、何だったのか。庁商のことか、校長排斥運動のことだったのだろうか。あるいは、青年の思弁的発言だろうか。

高商では、初代渡辺校長が退任した。多喜二が入学して半年であった。彼は小樽高商の初めの段階の歴史をつくった。第2代校長には伴房次郎がなった。

## 6 わが家に帰る

多喜二は高商1年の終わる頃、伯父の家を出てわが家に帰ってきた。あるいは言葉を代えれば、伯父の家から解放されたのである。彼は伯父の家では、複雑な板挟みにいた。先ず、居候であった。伯母が彼と自分の子供たちとを、無意識的であろうが、差別した。そこに働く従業員つまりパン工場の職工は、多喜二を、主人の親戚で学校まで行かせてもらっているという目で見ていた。彼は、働くことは嫌でなかったし、貧しさや辛さを知っており、従業員たちに同情をしていたが、そうは見てもらえなかった。

毎朝、庁商に行く前にパンの配達などをやったし、帰ってからも働いた。級が進んでからは専ら帳簿つけであった。その長い労働が終ったのである。

彼は庁商では、皆が楽しみにしている修学旅行にも行けなかった。ほとんど伯父の家で働いていたのであって、夏冬の休み以外には実家に帰らなかった。その休みにさえも、よくアルバイトをした。港湾工事で潜水夫に空気を送るポンプ押しの仕事であった。これは人間の命にかかわるので気が抜けなかった。アルバイト料は家計の足しにしたらしい。ちなみに彼は、このポンプ押しの経験を基礎に、おそらくフィクションを交えて「断稿(その九)」<sup>35)</sup>を高商時代に書いている。この女の愛と嫉妬と犯罪の事件は、ふくらませば短編小説の格好の筋書きになるし、普通の小説家ならばそうしたであろう。多喜二はしなかった。

35) 『全集』第6巻 528-9ページ

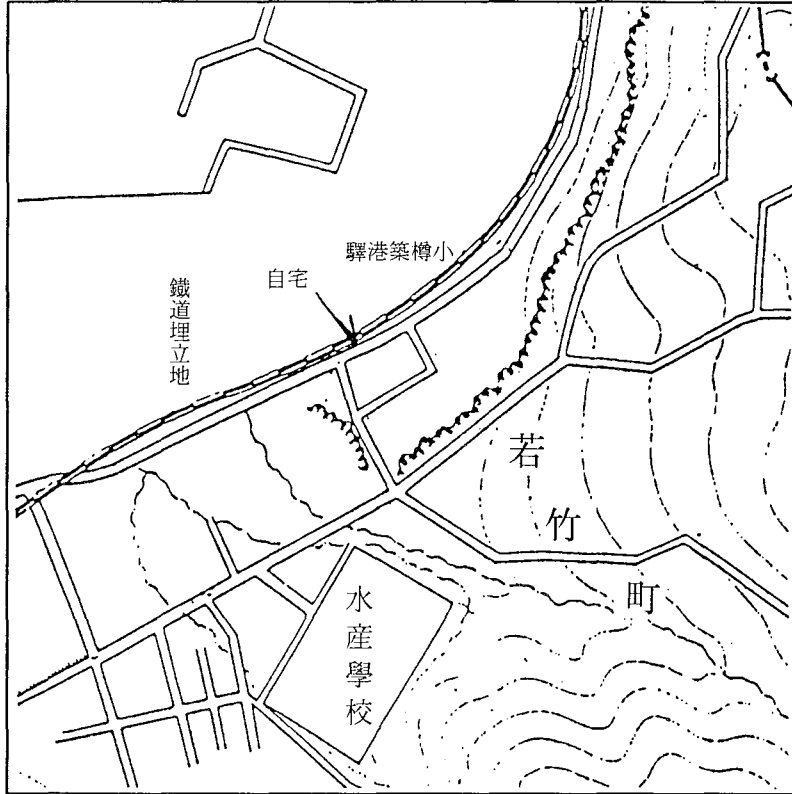
彼の帰ってきた実家は、若竹町一八番地で、小樽築港駅に近く、線路に沿って100メートルくらい離れたところにあった。小林一家は、秋田から小樽に着いて、若竹町に住んだ。だが区画整理や、宅地が鉄道用地となったりして、移転した。最後が若竹町一八番地であって、彼はここに戻ってきた。家では依然、駄菓子屋を開いており、また伯父の小林三ツ屋堂の支店としてパンを売っていた。家族は父、母、姉、弟、妹2人、の7人家族であった。

小林家は次の略図にあるところにあった。第三吾氏によると、家は四つの部分に分かれていた。通りに面している左=3が店で、右=4が作業の部屋である。そこで餅などを作った。奥の左=1が畳の部屋であり、奥の右=2が板の間で炉がある部屋である。二階はタキさんが来る時（後述）作ったという。

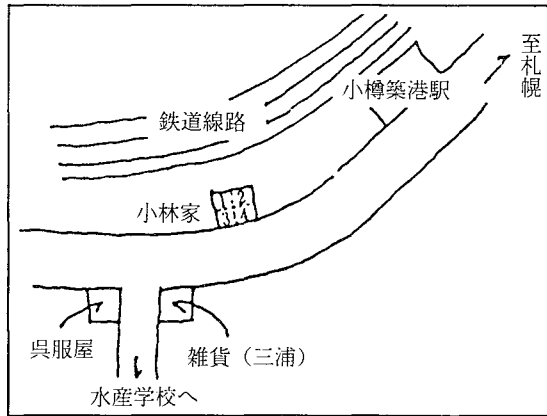
小林多喜二の家は、石本氏と二木さんによると大体こうである。家の山側は、側まで崖が来ていた。その崖を崩して港が、埋め立てられ、その後現在のマンションが建った。この土木工事はいわゆる監獄部屋の労働者によって行われた。そうすると、多喜二の母が、監獄部屋から逃げだしてきた労働者にパンを与えたというのは、この人々だった。

周りは商店が多かった。小林家は本来は駄菓子家だったが、民家風で一軒家であった。屋根が低い家で、二階建てであった。10坪もないようだった。一階は、入口を入れて左手に台所があって、上がり台が三畳位の畳の部屋がある。菓子の折りが四つ五つある。これが駄菓子屋の店先となっていると思われる。そして母（あるいは家族）の居室があった。六～八畳であった。二階は裏二階で、くっつけたような感じで、建増しかもしれない。一部屋であった。これが多喜二の部屋である。6畳くらいの小さな部屋である。屋根裏を改造したものである。その中央は立っても頭がつかえないが、部屋の端では、立つと頭がつかえた。窓が二段ガラスであって、小さい窓が線路に向いていた。

多喜二は伯父の家での5年半または6年にわたる住み込み労働から解放されて、ほっとしたであろう。しかし痛い問題が残されることになる。



大正十三年 (縮尺 6 千分の 1)





## 7 家に帰った時期

多くの人が、多喜二は5年間伯父の家に住みこんだ、としている。だが、多喜二が伯父の家から解放されたのは、高商に入ってからすぐ、というわけではない。というのは、多喜二は庁商時代の級友石本武明氏あての、新発見の葉書でこう書いているからである。

「若し暇であったら来た給へ が、二十四五六日はみそかで帳面だから駄目だ。」<sup>36)</sup>これは1921年7月21日消印である。多喜二は石本氏に、自分の家に遊びに来るよう、書いている。この自分の家とは、後で分かるように、伯父の家である。「帳面」とは、彼が毎月つけていた帳簿で、伯父の店の商売の会計記録である。若竹町の商売では、三日もかかって帳面をつける必要はない。逆に言うと、彼は七月までは、少なくともまだ伯父の家にはいたのである。

1922年3月5日消印の葉書では、「今度築港駐車場のすぐ側に移ったから・・」<sup>37)</sup>と、石本氏に書いている。つまり、多喜二は、1922年8月から翌2月の間に実家に移ったのである。「今度」としているから、二月ではないかと思われる。手塚伝記では、高商を出てすぐ、となっているから、誤りである。尤も石本氏は、彼が伯父の家にいる時代は、遠慮して行かなかった。彼が築港駅の実家に行ってから、よく遊びに行った、と言う。<sup>38)</sup>

多喜二家の近くに住んでいた二木さん（現姓）は、高商時代に家から通った多喜二の姿、詰め襟の高商時代の制服の彼を、見たことがないと言う。彼は必ず自分の家の前を通るはずなのに、と。<sup>39)</sup>高商時代の残りの時期、2年と少しの時期も、多喜二が朝早く家を出て、遅く帰ってきたら、二木さんに会わなかったということも、十分成り立つであろう。二木さんは、多喜二の妹の幸さんと同級生であった人であるが、この当時四～五才くらいである。もし記憶が正確

36) 『民主文学』1984年2月号、88ページ

37) 同、91ページ

38) 石本氏インタビュー。

39) 小生が手塚説に基づいて質問した際の答え。だから二木さんは、部分的には正しい。

だとすると、確かなことは、四～六才の女の子が遊びが終わって家の中へ入ってしまった後に、いつも多喜二が帰ってきたにちがいないのである。恐らく、高商の図書館で良く勉強したり、友人と交わったり、部活動をしたりして、帰りが遅くなったのであろう。弟三吾氏も、多喜二が高商に入ってから家〔実家〕に戻って来たと、言う。<sup>40)</sup>

## 8 なぜ伯父の家から解放されたか。

多喜二は、高商入学を機に、その少し後で、伯父の家での数年間の住み込み労働から解放された。それはともかく、こういう生活から解放されて、多喜二はほっとしたであろう。しかし、そうも言っていられない、大変心の痛む状況があった。

彼がなぜ、伯父の家から解放されたのであろうか。伯父は高商1年の途中以降、多喜二を働らかさなで、何故、月謝を援助するだけとなったのか。庁商時代の友人石本氏は、伯父が、勉強が大変だろうから解放したのではない、伯父が大変理解があった、と推測している<sup>41)</sup>。小笠原氏によると、伯父は、まさか高商生をもう雇い人として使うことはできないと考えた、と言う。出世払いだったのだらうと。高商生は、当時エリートだったのである。<sup>42)</sup>

だが、本当は違うのである。それは弟三吾〔氏〕に関わっていた。多喜二が庁商を卒業した時、つまり大正十年に、弟三吾〔氏〕もちょうど塩見台小学校を卒業した。<sup>43)</sup>同小の記録によれば、三吾氏は、大正九年度卒業生である。つまり大正十年3月卒である。手塚伝記によれば、多喜二が家に帰ってきたとき、弟は塩見台小学校に通っていた、と書かれている。二重の誤りである。

弟三吾氏は、小学校を卒業してからどうなったのであろうか。手塚伝記によれ

40) 三吾氏インタビュー。

41) 石本氏へのインタビューより。

42) 小笠原 克講演、前出より。

43) お調べ頂いた同校の藤村教諭に感謝する。

ば、「伯父が関係していた花園町の石垣洋品店に小僧奉公に住み込まねばならぬ」<sup>44)</sup> だったとある。同伝記の調べは、的に近づいたが当たらなかった。

これをもっと正確に言おう。この石垣洋品店は伯父が出資して建てた店である。つまり伯父は、三吾を自分の店で働かせることにしたのであった。三吾氏は、小学校を卒業して姉や兄のように上級学校に進学しなかった。当時は、上級の学校に進学する比率はとても少ない。その上、三吾氏は進学するつもりはなかった。「勉強は余り好きではなかった。特に商算などは、分からなかった」と語っている。<sup>45)</sup>

三吾氏を働かせることになって、多喜二を解放してもよくなってきた。それがいつかははっきりしないが、こうして多喜二は高商一年生の途中で実家に帰ってきた。弟が兄の「身代りであった。」<sup>46)</sup>

三吾氏は、石垣洋品店に住み込み、婦人用小物の行商を始めた。いろいろ回ったが、例えば、小樽病院にもよく行った。櫛などを売った。病院の看護婦さんたちにはよく可愛がられたと言う。十代前半であるから、彼女たちは本当に可愛いと思ったであろう。数年後、伯父の建てたこの石垣洋品店はつぶれてしまうのであるが、三吾氏は、そこで働き続ける。

こうして多喜二は、弟が身代りになって伯父の家から解放されたのであった。後に彼はこの思いを小説『蕪入』<sup>47)</sup>で書くのだが、「この小説は、だから正しいところがあるのです。」と、三吾氏は言う。

## 9 『蕪 入』

多喜二は、小樽高商に在学中の大正12年（1923年）の4月に、小説「蕪入」を書き上げ、『新興文学』に投稿し、それが同誌7月号に載った。これはその雑誌の当選作である。蕪入（やぶいり）というのは、奉公人が正月と盆に休み

44) 手塚, 上, 74ページ

45) 小林三吾氏, 東京での小生とのインタビューより。

46) 同。

47) 『全集』第一巻所収。

を貰い、実家に帰ることである。その際、少し小遣い銭を貰う。前近代的な雇用関係の中で、日本には主に戦前までであったものであり、奉公人は、将来の恩恵を約束され、安い給金で、あるいは殆ど給金をもらわずに働いていた。

この小説では、主人公の龍介が、これまでF運送店で働きながら、学資を出してもらって中学校に通い、卒業した。さらにその運送店の主人によって、大学の予科に通わせてもらっている。だが彼はその店から出て家から通うことになった。その代わり、小学校を出たばかりの弟の由が同運送店に勤めることになった。そこで主人公は、弟にたいして済まないと思い、弟が自分を恨んでいえるのではないかと考える。また自分が自我主義者で、卑怯者だと思う。

「蕨入」の日であった。弟が実家に帰ってくる。久し振りに会える。活動写真(＝映画)につれて行ってやろう、そば屋で何か食おう、と龍介は思う。しかしそれもエゴイズムを美しい仮面で覆い隠そうとしていると知る。また親たちが「蕨入」に、弟のために鶏を殺し、餅をついてご馳走しようとしている。しかしそれも、「自分たちの利益のために、子の気持ちを親たちにつないでおくために」そうするのではないかと問う。主人公は、「明らかにそういう恐るべき虚偽を『蕨入』に発見した。」そして小僧が「自覚せざる搾取を強いられている」と考え、深い憂鬱にとらえられるのである。

このあらすじは、そっくりそのまま多喜二自身だと見ることができる。主人公龍介を多喜二とし、通っている予科を小樽高商とし、弟の由を三吾とし、F運送店を伯父の三星パン店とし、弟の勤める所を石垣洋品店とすれば、殆どそっくりこのままである。

ここで幾つか指摘したい。先ず第1。三吾氏は余り上級学校に行きたくなかったので、この小説で弟を犠牲にしたという主張は、少しオーヴァーである。

第2。蕨入を搾取の覆いと見なしていることは、一方では、多喜二のある種の思想的な進展である。高商で社会科学を勉強した成果でもあろう。しかし、この時代に合理主義者であればこの程度のことは認識できた。だから、こういう表現をしても社会主義者だということにはならない。また実際彼は社会主義

者ではない。

第3。彼は弟を踏台にしたと嘆いている点である。実際と小説とは今述べたように度合は違うとしても、そう考えたのは多喜二が心のやさしい人であることが分かる。つまり当時は、長男だけが学校へ行き、家をしっかり守り、次男以下は行かなくてもよい、あるいは行けなくても仕方がないと考えることもできたのである。尤も、多くの長男はこの主人公のように考えた。枝将氏<sup>48)</sup>は、多喜二がこの問題を考えていること、考えていない人間だとは思ってもらいたくなかったのだと、興味ある指摘をされた。

## 10 小林家の人々

多喜二は、伯父の家から解放されて、わが家に帰って来た。そこは楽しい家庭であるはずだった。だが彼の身代わりとして第三吾が、伯父の資本で建てた石垣洋品店——第2大通りにあった——で小僧奉公をしているので、家族全員が揃ったわけではなかった。また、また小林家は裕福ではなかった。

父は、心臓を悪くしていたが、働いていた。三星パンの支店としてパンを、また自分の家で作った餅を、売っていた。彼は浜までパンを売りに行っていた。店の客はあまり多くはなかった。父は酒を飲まなかった。雨の日は、一日中新聞を読んでいた。母のセキは、普通に主婦がよくやるように近所に出歩いたりする人ではなかった。また、しっかり者であった。小林家の人は、みなガツガツしていなかったし、のんびりしていた。姉弟はみな良く似ていたので、見れば、兄弟姉妹だということがすぐ分かった。姉妹は、よく喋り、賑やかだった。姉チマもそうだったが、妹ツギはもっと喋った。

小林家は、水産学校の校長先生に、よくお世話をしてもらった。そのお子さんの衣類を頂戴したものであった。福原という小樽の親切な医者が出て、病気になっても、お金をとらなかった。昔はそういう医者がいたのである。その奥

48) 小樽の医師だった。小樽多喜二委員会副会長。札幌在住。

さんも親切にしてくれた。

姉チマは、庁立小樽高等女学校をすでに卒業していた。チマは、小学校を卒業してから、伯父の援助で、庁立高等女学校へ進学することができた。彼女は卒業してから、手塚伝記によれば<sup>49)</sup>、農産物検査所に勤めた。<sup>50)</sup>

妹ツギ（1907年生まれ）は、緑が丘女学校に入学した。その後、同校を卒業する。だから手塚伝記で書かれているように、このころ勤めていたのではなく、この女学校に通っていたはずである。最後の妹、幸（ユキ）は、1916年（大正5年）生まれだが、若竹小学校に入学した。これは潮見台小学校が分離して出来た学校である。ここを卒業して、小樽市立女学校に入学することになり、同じくここを卒業する。

多喜二が戻ってきた家庭は、貧しくても賑やかな家庭だった。彼は物真似が得意で、藤原義江の歌や芝居の仕草で皆を笑わせた。後年、妹は云う。多喜二は「からだの強い兄弟思いで、けんかなど一度もしなかった。」<sup>51)</sup>チマさんは云う。「それに歌や音楽。・・・藤原義江の真似なんか、よくふざけてね。声もよかったんでしょうが、いろいろ歌ったりしました・・・」「歌でも芝居でも、何の真似でもしては騒いでいた。おもしろい家なんです・・・。母も一緒に歌ったりして。父は、本を読んだり新聞読んだりする方でした・・・」<sup>52)</sup>

## 11 豆撰女工

多喜二の姉チマが、庁立小樽高女に通いながら、学資のために今でいうアルバイトをして働いたが、その一つ、豆撰（とうせん）女工について語ろう。小樽の豆撰工場は、大正二年にできた有幌の高橋合名〔会社〕の工場、北浜と手

49) 手塚, 66ページ

50) 本項は、小林三吾氏、同夫人、二木さんへのインタビュー、小笠原講演、からなる。

51) 「急死したプロ作家」(『北海タイムス』15050号)

52) 『北方文芸』1968年3月号

宮の三井物産の工場をはじめとして、増えてきた。大正8年には、以上のほか、内外貿易小樽支店、三忠小樽支店、鈴木合名小樽支店、湯浅商店などの工場が26カ所となった。大正6・7年の最盛期には、女工は3千6百人<sup>53)</sup>、一説によると、アルバイトをいれて六千人<sup>54)</sup>に及んだと言われる。豆撰工場は小樽の名物であった。有幌に、大正時代に20の倉庫があった<sup>55)</sup>。その2階で、豆撰りがされた。

大正三年(1914年)に、第1次大戦が勃発した。豆の生産地ルーマニアやハンガリー、澱粉の産地オランダが戦場になったので、大正4年以後、日本から雑穀・澱粉の輸出が急増した。青えんどうはイギリスへ、手亡はインドへ積み出された。逆に十勝の豆が貨車で小樽にきた。青えんどうとは、グリーンピースである。ヨーロッパ人はこれを沢山食べる。手亡は、「てぼう」あるいは「てぼ」という。白い豆で、白いんげんに似ている。おもに、白あんを作る。その白あんは上等とされ、十勝平野が主産地である。

この頃、輸出のために豆の企画検査がされたので、豆撰が行われたのである。豆の品質その他に従って等級を区分して、それぞれの箱に入れる作業である。これを人手によって行う。だから手撰(てより)ともいう。その工場は、したがって手撰工場とも云うのだが、普通は2階建ての倉庫内にあった。そしてその2階で行われた。仕事の要領は、みかん箱一杯ほどの豆を監督から受け取り、それを平らなテーブルの上に広げて、その中からサッとくず豆をより分け、別々の箱に入れて監督の検査を受けるというものだった。<sup>56)</sup>

精撰料は、豆の種類によって違っていた。大福豆・中福豆・青えんどうのような大粒は安く、ビルマ[豆]・小手亡[こてぼう]などの小粒ものは高価であった。四函六〇キロが単位であるが、精選した量によって賃金が支給された。だから、手捌きの速い者や労働時間の長い者は、月額数十円をあげたといわれ

53) 『小樽市史』第3巻、1964年 218ページ

54) [渡辺悌之助]『小樽文化史』1974年 132ページ。手塚伝記もこれと同じ。

55) 琴坂

56) 『北の女性史』

る。もっとも普通は20円をこえなかったので、十数円というべきだろう。また1日最高七、八十銭を越えることはなかった。大正6年ころで、一日、二十から四十銭であった。日雇いの賃金が五十から七十銭であったから、低いものであった。

越崎は書く。「全道産組や農家から、〔雑穀や澱粉の〕現物は小樽へ送られ、営業倉庫は一杯になった。これら雑穀は堺町浜町辺の二十数軒の豆撰工場で撰別された。その主なものは、三井物産、三菱、曲辰鈴木、林松蔵、丸井桁井上、香村、上山キ高橋、井桁三中村などで、一名豆撰女学校とも呼ばれ、朝な夕な、盛装をこらした豆撰嬢が工場をゾロゾロ出入りする光景は、一異観だった。その数最盛時、三、六〇〇名と云われた。工場とは云っても、豆撰台以外には何も無い、人海戦術で行われたものだが、戦時好況中の女性にとっては、良いアルバイト稼ぎだった。

澱粉は、地方から未粉（みふん）で来たものを、市内工場で再製した。澱粉を主に扱ったのは、井桁三中村、八印盛、香村、丸井桁井上、湯浅などであった。これら雑穀澱粉問屋は、全盛時には百数十軒に達し、堺町、色内町、浜町筋に多かった。」「この問屋間の取引を斡旋する仲買（仲立人）の羽振りは、大したもの、雨天の日でも、メリヤスのもも引に、当時まだ珍しかったゴム長をはき、無尻を端しよって「売った」「買った」と店から店へ威勢よく飛びまわっていた。我々少年にも、この活き馬の眼を抜く勇ましい商業戦士たちの姿は、カッコいいものに映った。」<sup>57)</sup>

戦争景気の波にのって、豆成金や澱粉成金が小樽に続出した。特に有名なのは高橋直治であり、欧州向けの直輸出をし、ロンドン市場の相場をゆさぶって、小豆將軍の異名をとった。小豆將軍のような成金を、世間では「成金さん」といい、その言葉がはやっていた。高橋直吉は、越後出身で、あずき大尽といわれた。何百万円かの金で北海道のあずきを買い占めた。したがって、あずきの相場は高橋によって決まった。明治35年の第1回衆院選挙で代議士になった。

57) 越崎, 30-31ページ



酒のみで、大豪邸を作った。政治に金を使い、1代でほろびた。<sup>58)</sup>大正15年に、急死した。

しかし、大正7年10月には、物価騰貴が原因で、女工の同盟罷業が起きた。それは米騒動の年であった。小樽では米騒動が暴発しなかった。アルバイト先＝豆撰があったから、であった。ただし、ストライキが起きた。十月に上光第2豆撰工場の女工たちだった。つまり、百余名か2百余名が半日帰宅した。さて大戦後は、輸出が激減し、多くの工場が閉鎖され、女工が失業した。そのため、酌婦や売春婦に転落する者もでてきた。

チマが働いたのは、彼女が庁立高女にいた時だというから、大正2年から7年の間であろうが、その時期の後半ではないだろうか。それも時々であろう。学校があるから夕方から夜にかけて働いたのであろう。多喜二は、小説「同志田口の感傷」の初めの部分<sup>59)</sup>で、この工場で働く姉を登場させている。そこで描かれているのは、姉チマの生活そのものである。多喜二は自分で働きに行ったことがないから、姉から上京を聞いたのではないか。あるいは経験者に聞いたのかもしれない。

## 12 高商2年になって

1922年（大正11年）、多喜二は、二年生に進級した。二年生は三クラス制であった。この時、50余名が落第した。二年生になる少し前に、多喜二は伯父の家から実家に戻ってきた。

高商では一年生の時は、庁商からの同級生が、彼以外には二人しかいなかった。ただし二、三年生には見知った先輩が、それぞれ各年で、十数人づつはいた。友人は、小樽には、庁商から百十三銀行に勤めた親友片岡亮一や斎藤次郎がいた。斎藤はその後、明治大学に入学し、健康を害して小樽に戻り、絵を画

58) 奥田二郎

59) 『全集』第3巻、61-62ページ

いていた。片岡亮一も百十三銀行を一年でやめ、小樽高商に入学した。だから高商では親友が一人戻ってきた。そして庁商から高商への、いわゆる解禁が解けたので、一年生には例年のごとく十数人が入学した。こうして多喜二は、多くの旧級友を下級生に持ったのである。その1人は安宅文雄氏である。

多喜二は石本氏を、自分が高商を受験するときに、一緒に受験しようと誘い<sup>60)</sup>、石本氏は家庭の都合で受験しなかった。だが、もしも受験しても、この年、つまり一年前は、庁商からの合格者を制限していたので、入学は難しかったであろう。多喜二はその後、手紙でまた受験を誘っている。<sup>61)</sup>

この年、伊藤整が受験した。多喜二の同級、佐藤は書く。2学年の新学期の英話の時間だった。小林象三教授が、いつものセカセカした足取りで教壇に立つなり、自慢の美しい澄んだ音律で、朝の挨拶をした後、恒例により、その年の入学試験の英語問題について、つぎつぎにその正解や珍答迷解を披露した。ある問題にかかり、「諸君、今年を受験生には凄いのがいる。この訳をナント”親はなくとも子は育つ！”とやった。』いかにもわが意を得たり！といわんばかりの会心の笑みをもらした。その問題は、ネスル・ミルク・フードの広告文で、句読点を全部抜いた、ノッペラボウの文章に、適当な句読点を付して和訳せよ、というものであった。原文を直訳すると「世の母者人よ。貴女の赤ん坊は哺育せよ。もしそれができないなら、ネスルを使用せよ。」といったもので、簡単なイデオムを交えたしゃれた文章であった。訳の主は伊藤整らしかった。<sup>62)</sup>

### 13 文学へ

1922年春、多喜二が2年生になった時、島田正策は室蘭から小樽に転勤になった。島田は多喜二とは、全く恋人に再会するような気持ちで、毎日のよう

60) 石本インタビュー

61) 石本あて手紙(『民主文学』1984年2月号)

62) 小樽高等商業学校大正一三年卒業『五十周年記念文集』

に会った。1922年の8月20日に島田は、文集『自画像』を出した。これに多喜二は序文を書いた<sup>63)</sup>。

四月に、多喜二は校友会誌の編集委員に選ばれた。もう1人の委員は、高浜虚子の長男、年尾であった。彼は俳句を作っていた。教師の中では、大熊信行と最も親しくなった。

多喜二は、近代劇研究会にも加わった。ここで乗富道夫<sup>64)</sup> (1903-1934) と友人になった。乗富は多喜二の生涯にとって大きな意味のある人物である。彼は福岡県大牟田市に生まれた。樺太の豊原中学を卒業し、小樽高商に入学した。そして多喜二と同学年となった。高商時代に多喜二に思想上の最も重要な影響を与えた1人である。乗富は、卒業論文に「共産党宣言」を訳した。

高商の『校友会雑誌』に多喜二は、翻訳「ダニエルの夢」、短編「悩み」、バルビュスの翻訳、小説「継祖母のこと」、「ロクの恋物語」、「ある役割」を出すことになる。彼は雑誌にも投稿して、当選したり、選外佳作になった。「正当不正当」を『小説倶楽部』に出した。「兄」、「健」、「藪入」が『新興文学』で当選し、「龍介とS子」、「春ちゃんの場合」は予選に入った。「兄」の主人公は、島田正策である。つまり多喜二は高商1年の時は、まだ旺盛に創作を発表してはいなかったが、高商2年から大活躍をしはじめるのである。もしかしたら実家に帰ってきたこともその原因になったのではないか。

多喜二の断稿で、「夏の病院」を含む11の作がある<sup>65)</sup>。執筆年は不明であるが、高商時代のものであろう。皆、違う習作であり、そのいくつかは、後に改作されている。

多喜二は『小説倶楽部』の熱心な常連寄稿家だった。多喜二の文学的出発に

63) 『小林多喜二全集』(新)第6巻 新日本出版社 1982年、所収。

64) 乗富は、卒業して、安田銀行函館支店に勤めた。労働農民党员となる。産業労働調査所函館支社長にもなった。これは野坂参三が東京で作った調査所の函館支部で、あまり大きなものではない。彼は北洋漁業を研究した。そのため、多喜二は『蟹工船』を書く時、彼から資料を教わった。1930年に検挙され、安田銀行を解雇され、上京し、1934年9月病没した。

65) 『全集』

あたって、『小説倶楽部』と『新興文学』が、どんなにかその試練と修練の舞台になっただろう・・・だが、『小説倶楽部』は22年8月号が発売禁止となつて、同年9月号で終刊となつた。これをうけたかたちで、そのあと山田清三郎が『新興文学』——明白に新興プロレタリア文芸誌を意図した——の発刊を企て、22年11月創刊となつた。『新興文学』の創刊号に早くも多喜二の応募作品があつたのは、実は『小説倶楽部』に送られてきていたものだったのである。『小説倶楽部』の応募作品の選者は、加藤作次郎、ついで上司小剣であつた。

多喜二の『健』が掲載された号の宮島新三郎の「短編小説選評」の1部はこうだつた。

「今までになく、好いものが集まつたやうに思ふ。編輯者から送られた予選七篇が、七篇とも相当に読めるものであつたことを、何より嬉しく思ふ。

小林多喜二君の『健』は、前回の「春ちゃんの場合」と比較すると、別人の作ではないかと思われるほど、勝れた芸術的天分を見せてゐる、頭脳の透明さと表現的確さとを思わせるに十分な作だ。山の中から都会へ連れられて来た健の心持、それには光明があつた。けれど成金振りの伯母の仕打、人々の心を一にするのではなく、分けへだてを設けるやうな学校の方針、そこには幻滅があつた。その小さい純な魂を通して吾々は何を感じるだろうか。」そして7篇の順位のうち、多喜二は1位であつた。<sup>66)</sup>

短歌については、多喜二は少年時代から啄木の短歌を好み、彼の家で啄木の会を催して啄木を語り、よそで開かれた啄木会にも出席し、母に啄木のことを何くれとなく語つたので、啄木について何も知らなかつた母も、いつの間にか啄木のことを知るようになった。高田紅果なども、このグループに関係を持つていた。<sup>67)</sup>そうすると、啄木会で、高田と多喜二とが会つたか、話をしたか、ということもありうる。

66) 山田, 「小林多喜二全集 月報2」8ページ

67) 碓田, 全集月報6

伊藤整は多喜二についてこう書いている。「小樽高商に入ると、その男は私の一年上級生で、高商の廊下のリノリウムの上を威張って歩いていた。それが校友会誌に小説を書く小林多喜二という男だった。」<sup>68)</sup>ただし多喜二が威張って歩いていたのではないだろう。彼はそういう歩き方をしていたのである。整にはしかし、そう見えた。整が高商に入ると、「その蒼白い艶の悪い細長い背の低い彼 [=多喜二] が、学校の廊下をそり身になって自信ありげに歩いていた。・・・高商へ入ってから彼は思想上急速に進歩し、小説にも自信を持ったようである。」<sup>69)</sup>ここに言う思想というのが左翼思想とすれば、もちろん多喜二は、高商に入ってから「思想上」「急速に」進歩してはいない。

続いてまた彼は書く。多喜二は、「生徒仲間でも、小説を書く男で、よく教師に喰ってかかったりする無邪気な元気者という意味でよく知られていた。だがその頃は校友会誌に発表された幾つかの彼の小説は、十分巧妙ではあったが、左翼的色彩の全くないものであった。」<sup>70)</sup>

ところで伊藤は、入学後まもないある日、ある教授の講義をどこかの教授のひきうつしだと、攻撃する、学校新聞——新聞でなくピラであろう——が張り出されているのを見た。それを読んだ時、伊藤はこの学校にはあの思想を持った生徒が何人もいるにちがいない、と考えた。「あの思想」というのは、自由主義、共産主義、無政府主義、反軍国主義などの新思想である。ただし、こう思ったのは、整の小説を面白くするためだろう。

## 14 授 業

多喜二の同学年生、伊部（大正13年卒）が受けた授業は次である。商業英語の中村賢二郎、英作文の浜林、漢文の卜部、民法の木部、財政学の平尾、ドイツ語のデーゲン。多喜二も同じくこれらを受けていたかも知れない。

68) 『伊藤整全集』第二三巻 新潮社 1976年 31ページ。

69) 同 31ページ。

70) 同 263ページ

高商では2年生になると第2外国語をとることになっていた。多喜二はフランス語を履修した。第2外国語は、週にわずか3、4時間しかなかった。またフランス語は文学好きな学生がとった。当時、高商でドイツ語とフランス語を教えていたのは、デーゲン先生であって、「大変明るい感じだった。ロシア語はスミルニツキーだったようだ。小樽市民にもよく親しまれた人で、小馬ののって市内に出かけた。」<sup>71)</sup>しかし、多喜二はスミルニツキーに教わっていない。多喜二はフランス語選択だったからである。

大野純一は小樽高商の講師として大正11年4月に赴任し、その年の12月には兵役に服したので、その時高商2年生の多喜二には8カ月しか接していない。当時はじめて教壇に立つ若い教師には、原書購読をさせる習慣だったので、大野は、Esher, *The Foreign Exchange Explained* を使った。一応皆に一節くらいずつ割り当てて直訳をさせてからその意義について講義した。全然予習をしてこない者も1人や2人はいた。しかし多喜二は、順番が狂って他人のところが当たっても必ず適切な訳をした。したがって多喜二にとっては多分興味が薄い科目であったろうが——と大野——、良い点数をとっていた。大野にとって多喜二の印象は、温厚で真面目な勉強家、というものである。<sup>72)</sup>

大正12年度に室谷が一橋を出て高商の教員に任用されたとき、小林多喜二は最上級の3年生に在学していた。彼の担当は2年生全体に対する「商工経営」、3年生に対する分科（ゼミナール予備形式の原書講読）、3年生全体にたいする商業実践の授業であった。室谷の分科に小林多喜二は入っていなかった。夏休み修了後の第2学期から始まる実践の時間に、毎週指導教官のなかに交る室谷をみていたわけだ。<sup>73)</sup>

夏堀悌二郎は、小樽の地方裁判所の判事で、小樽高商の民法概論の講師も受け持っていた。多喜二や整を教えたという。ただし『商大五十年史』には夏堀の名の記載がなく、多喜二の成績表では第2学年で「民法」を受けてはいる

71) 『緑丘』

72) 大野「市井の人小林多喜二の片鱗」(『緑丘』42, 19ページ)

73) 室谷賢治郎(『緑丘』42)

が、「民法概論」というものはない。

多喜二は非常にまじめな青年だったと云う。夏堀の授業を非常に熱心に聞いていて、講義中に。「いまの日本の民法や刑法では人間の基本的な人権を守る点で不備なのではありませんか」と質問して、夏堀をおおいに悩ませた。

彼も「そうだな、正直言って私も満足すべきものではないと思っている。たとえば、自白が証拠の王様だという考え方があるかぎり、拷問はなくならん。拷問が自白を強制し、その自白が拷問を正当化するという図式は私個人はなくすべきだと考えている」と、思わず本音を吐かざるをえない答弁をさせられた。

さらに多喜二は第2弾を放ってきた。「先生はかなりリベラル派の判事さんですね。」

たしかにそのころ刑法や民法の欠点について触れる判事はいなかったらしい。その後多喜二は、「大震災後、議会では治安維持に関する法案を審議していると伝えられていますが、それは特定の正当や言論、表現の自由を弾圧する法律ではないのですか。だとしたら、僕は憲法違反だと思うのですが」と、これも鋭く切り込んできた。夏堀はこの質問にはたじたとって、なかば立ち往生し、抽象的な答弁をしてみせ、それ以上答えることができなかった。<sup>74)</sup>

## 15 友達思い

服部兵吾(大正13年高商卒)は、同級だが、多喜二とは余り付き合いはなかった。だがこう言う。「小林君とは、学校の廊下などでまともに出会って、いつも雑誌かノートを小脇に抱え、ヤーといった挨拶で柔和な顔が消えて行く、どこか真し〔漢字で〕な人柄を思わせた。」

「ある夏の日、小型のリヤカーをひいているのに出くわしたが、この時も互いにヤーといった挨拶で通り去った。家業にも忠実な孝行息子だなあと感じ

---

74) 『民主文学』。夏堀の名は、不思議なことに『緑丘五十年史』の教員名簿にでていない。先任の講師から引き継いで、半年教えたといわれる。教えたのは、「民法」であろう。多喜二は2年生の時、民法を受講している。

入った。」<sup>75)</sup>これは多分、多喜二がまだ伯父の家で仕事をしていることを示している。

桜井長徳は、後に北海道新聞社取締役になった人である。彼は、小林多喜二とは高商で三年間一緒だった。また学校以前から投書家仲間だった。ただ一度も同じクラスだったことはない。しかし、学校時代も卒業後も、比較的親しくしていたから、憶い出は相当ある。・・・

桜井は小樽に来てはじめて多喜二に会ったのだが、小林多喜二という名前はそれ以前から知っていた。それは当時相当広く読まれていた『文章世界』という雑誌に、多喜二の投稿が時々載ったことからである。特に彼の「コマ画」——一種のカットのよう画——が時々入選したので、名前だけは覚えていた。最初に会った時、「ああこの男が小林多喜二か」と思い、『文章世界』の話などをし合った。小林とつき合うようになったのもそんなことからだった、と言う。2年生の時、桜井は、小林や高浜年尾などと校友会の編集部の仕事を一緒にしたこともあった。

桜井は書く、「私は中学出で しかも頭が悪いので 簿記が一番苦手であった。」ここで「頭が悪い」というのは、謙遜である。また中学校では、あまり簿記などを学んでいないから、こう言うわけである。「第一覚える気持があまりないので殆んど何も分らず仕舞いであった。それでも一年の時の商業簿記は何とか理解できたようであったが、2年の銀行簿記になったらすっかりコンガラカッテ、何が何だかさっぱり判らなくなった。学年試験の時、全然手がつけられず、第一、帳簿の線が引っぱられないので、名前だけ書いて白紙答案を出してしまった。」

担任の糸魚川祐三郎先生がすっかり怒って、当然ゼロ点——落第のうき目を見るところだったが、その時多喜二が、桜井を可愛相に思い、糸魚川先生を訪ね、「桜井は、本当に簿記が何も判らないため、答案が書けなかったので、それ以外の他意は毛頭ないのですから」と詫びたり、頼んだりしてくれたので、

75) 『緑丘』42



やっと助かったことがある。”本当に出来ない”ことを証明して及第させてもらったなんて変な話したが,”悪質の白紙答案”でないことが判つて、先生はあきれ乍ら許してくれた、というわけであった。多喜二が、大変友だち思いの学生であったことが分かる。

学校では彼のことを、小林などと呼ぶものはなく、多喜とか多喜二とついでいた。めったに制服をきないで、いつも綿銘仙の茶がすりの上下、袴は綿セルのねずみ色のをはいていた。シャベツテいる間に口角からヨダレをたらすクセがあって、そのヨダレを左手甲でぬぐいながら、しゃべりつづけた。その時彼はいつも他愛なく独りでゲラゲラ笑っていた。<sup>76)</sup>

## 16 校友会誌

糸魚川祐三郎は、大正11年に高商に赴任すると、いきなり校友会雑誌の編集に関係をもたされた。この頃、校友会雑誌は文芸部の生徒が編集を担当していて、ある意味で文芸部員生徒の同人雑誌の色彩もあった。糸魚川の任務は、そのような色彩が濃くなりすぎるのを適度に抑えて、同窓会記事を載せることであった。出版費用はもちろん同窓会からでていたからである。部員には小林多喜二、高浜年雄、佐々木妙二などがいた。

多喜二が何か糸魚川の書いたものを読んだのであろう。あるとき、「先生はそのような見方をなさるんなら、ビョルソン（ツルゲネフであったかもしれない）のものをお読みになったらよいでしょう」といった。

糸魚川は、「コイツ生意気なことをいう生徒だな」と思った。

その後、糸魚川がゾンバルト<sup>77)</sup>の『近世資本主義とユダヤ人』の英訳を図書館から借りだしていたら、多喜二が、「先生、私も読みたいから図書館へ返し

76) 桜井長徳「よだれをたらす多喜二」の主に後半部分より、小樽商大『緑丘』250号。利用にさいして、最低の句読点を加えておいた。

77) ウエルナー・ゾンバルト (Werner Sombart, 1863-1941), ドイツの経済学者。主著『近代資本主義』2巻, 1902年。

て下さい」と言ってきたことがある。そこで糸魚川は、「この生徒、単なる文学青年でなく、社会科学の勉強をしているな」と思った。

この当時の写真によると部員には安野安平もいる。編集上の必要があったので、部員が書いたものをたまに作品の合評会をやった、と糸魚川は言う。<sup>78)</sup>

多喜二が高商二年生になったとき、伊藤整が入学した。伊藤は書いている。「多喜二が廊下をやって来ると私は空気が一間ほど向こうからふくらんで押し出して来るような気がしたものである。しかし校友会雑誌に私が詩を投げたりしたことなどから、彼も私を覚え、逢うと言葉をかけるようになった。芝居を一緒にした事も彼と私を近づけた。」<sup>79)</sup>芝居をしたのはもちろん後のことである。

多喜二は学校の学芸部の中心であった。<sup>80)</sup>

多喜二の一級下に佐々木妙二（たえじ）という人がいる。伊藤整と同級である。佐々木は、明治36年3月15日に、秋田県大館町に生まれた。多喜二とほとんど同郷である。中学を卒業後、地元（秋田のことだろう）の小学校の代用教員を1年勤め、小樽高商に入学した<sup>81)</sup>。だから多喜二と同年生まれであるが、多喜二の1年下級生になった。高商には秋田県出身者も多く、上級生が新入生歓迎会を開いてくれた。その会で1年上級の小林多喜二に初めて会った。多喜二は秋田生まれなので、秋田県人会のメンバーになっていた。下川沿村は大館町の隣であった。佐々木は多喜二にさそわれ、校友会雑誌編集部に入った。短歌だけは中学のころから、父や伯父を真似て作っていたので、佐々木はいっぱしの己惚れを持っていた。短歌は高商短歌会などを作って熱を入れていた。その頃彼は吉井勇の短歌に興味を持っていた。そんな時の佐々木の短歌を、多喜二から「君の短歌は駄目だ。駄目なのは表現ではない、君の生きざまだよ」と酷評された。口悔しかったからつぎつぎ作ったが、多喜二からはきまって「君

78) 糸魚川（『緑丘』通巻42号）

79) 『伊藤整全集』第二三巻 新潮社 1976年264ページ

80) 同, 258ページ

81) しかし在学名簿（上掲）には、多喜二の学年に記載されている。不思議である。入学だけして、実際は1年遅れてから通学したのだろうか。

の生きざまが問題だよ」ときめつけられた。「まだわからないのか」という顔いろだった。佐々木は、多喜二は短歌がよくわからないのではないかと思ったこともあった。

編集部は多喜二と高浜年尾が中心であった。伊藤整は、佐々木の同級だが、多喜二とは対照的に線の細い淑女のような秀才の感じで、編集部には近よらなかった。

高商2年の秋、佐々木は肺浸潤に侵されて、療養のため休学して郷里に帰った。この療養の2年間は、自分をふりかえる月日となり、佐々木の短歌も生まれ変わった時期であった。佐々木は、以前から短歌も日常語（現代語）で表現するのが最も自然で、本来そうあるべき、と考えていた。佐々木の母校大館中学の村木清一郎（『万葉集』全巻の口語訳者）の指導助言を受けて、日常短歌を作り始めた。

高商に復学した時には、多喜二も同級生もほとんどいなかった。高商を出てから、税務署勤務を経て、秋田県師範学校に勤めた。英語の先生をした。昭和4年の夏のころ、多喜二が後輩の三浦強太とともに何かのついでに佐々木を訪ねて学校に立ち寄った。急ぐからと言って、1時間ほどしか話ができなかった。それが佐々木の多喜二に会った最後だった。

昭和4年、佐々木は、大熊信行主宰の歌誌『まるめら』に同人として参加していた。無産者短歌の先駆的存在の1つであった。この歌誌に発表した佐々木の短歌や文章が左翼的で、赤といわれ、師範学校の教師としてふさわしくないと、かく首された。あるいは勤めづらくなってやめた。彼は、かく首されない職業を求めて上京し、医学に転じた。東京医専を卒業し、都立病院に勤務し、産婦人科医院長を勤めたり、医院を開設した。渡辺順三<sup>82)</sup>の『短歌時代』に参加した。終戦と同時に、渡辺順三の新日本歌人に参加した。渡辺は、プロレタリア短歌の指導者として重い存在であった。渡辺順三が創刊した『人民短歌』

---

82) プロレタリア短歌の代表的人物。(1894-1972)。自伝『烈風の中を』東邦出版社 1973年、伝記 碓田のぼる『手錠あり』青磁社 1985年

に参加したとも言う。佐々木は、歌集に、『診療室』『佐々木妙二集』『仕事着』『火芯』『かぎりなく』『生』『いのち』がある。

佐々木は言う。短歌は本質的には思想の表現，作者そのものの表現であり，作者の生き方が作品のいのちであるという，わかりきったことが私にわかるまで，長い年月かかった，と。これは多喜二の思想である。

小林多喜二とは小樽高商の下級生の編集委員として，短い間のつきあいに過ぎなかったが，私の頭をどかんとなぐりつけた一言と，その生涯の生き方が私の短歌を，否，私自身を支えている，<sup>83)</sup>と。佐々木は詠む。

九十歳超えても上級生多喜二がいる

「君の生き方はそれでいいのか」

---

83) 佐々木妙二「上級生多喜二」(教職員交流誌『ほんりゅう』1994年4月号)14-15ページ(石井 大三郎氏提供)；その他

追 加

前々号「小樽高商の先生たち」(『商学討究』第45巻1号 1994年8月)について，榎原昭夫さんから次の2点指摘があった。

66ページ。「一周忌追悼会」は、「多分，一周忌ではなく，それより前の追悼会」であったらしい。

69ページ。「鼻持ちのならないグループ」とは、「高浜年尾たちのこと」だそうだ。(追記)本稿は，高商史研究会の活動の一結果である。